蝶と子供たち

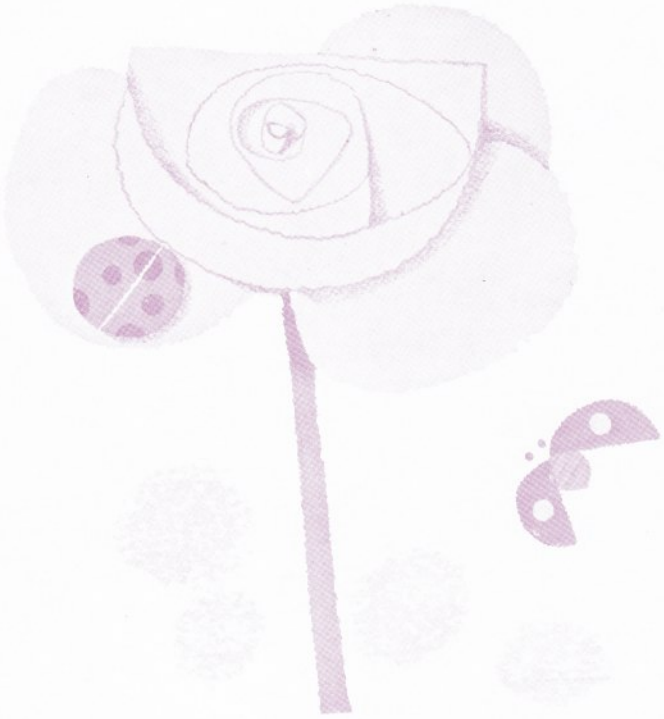
石井勲編

漢字絵本１

天道虫

花
葉

美しく　咲いた
ばらの　垣根で、
天道虫が　隠れんぼを
していました。
そこへ　子供たちが
やって来て、
天道虫を　見つけ、
つかまえようと
しました。
子供たちと　天道虫の
鬼ごっこです。



この絵本は幼児に読んで聞かせるためのものです。絵のページを幼児の方に向け、その裏の文章のページを自分の方に向けて読んで下さい。紙芝居のように使うことができます。今では科学的な測定により『漢字で書かれた言葉は、かなばかりで書かれた言葉の十分の一の時間で読める』ことが判りました。この

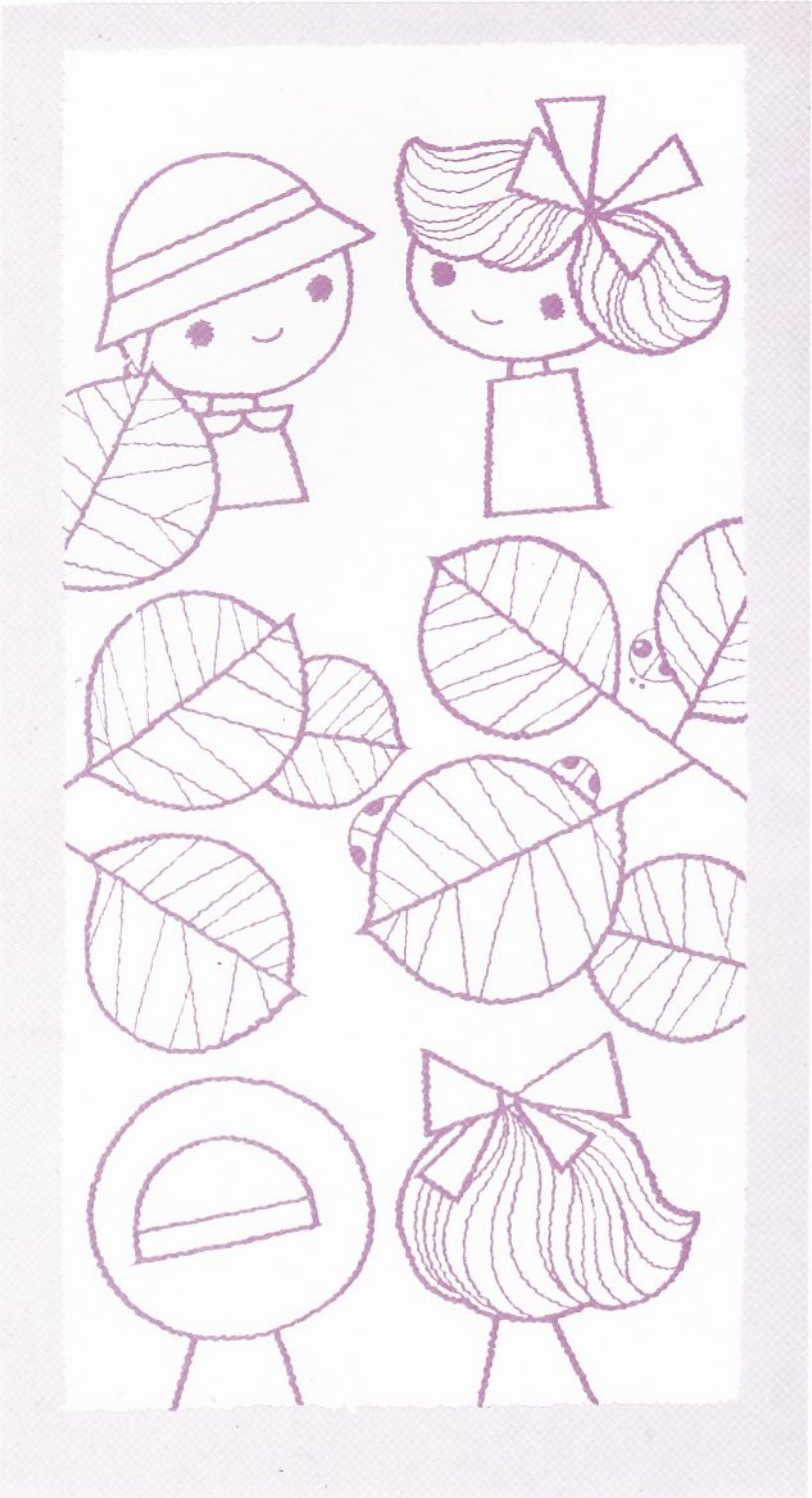
絵本は、漢字かな混り文で書かれていますから、余裕をもって読むことができます。子供の表情を見ながら読んでやるようでなければ、子供を心から楽しませてやることはできません。その意味で、このような絵本だけが、真に子供のための絵本だと言えましょう。幼児には、絵のページの漢字だけ教えてやって下さい。と言っても、絵と字と対応させて、それが何と読む字かを子供に考えさせ当てさせるようにして、詰込みにならないようにして下さい。

花
女の子

天道虫
男の子

そこへ　蝶々が
舞って来ました。
「あっ、蝶々だ」
子供たちは、
天道虫を　追うのを
止めて、蝶々を
追いかけ始めました。
今度は、

文章のページは、子供に教えるページではありませんが、その中から読める漢字を拾い出させるのは良い学習です。子供は、文章の中から読める漢字を見付け出すことに非常な興味を持っており、それをゲームのように楽しんでするものです。そもそも文字は、覚えるためにあるものではなく、読むためにあるものです。そのように頭の訓練法としても、文字を〝読む〟ことの方が、覚えることよりも子供の頭の働きを良くするのに役立つのです。今までは、教える



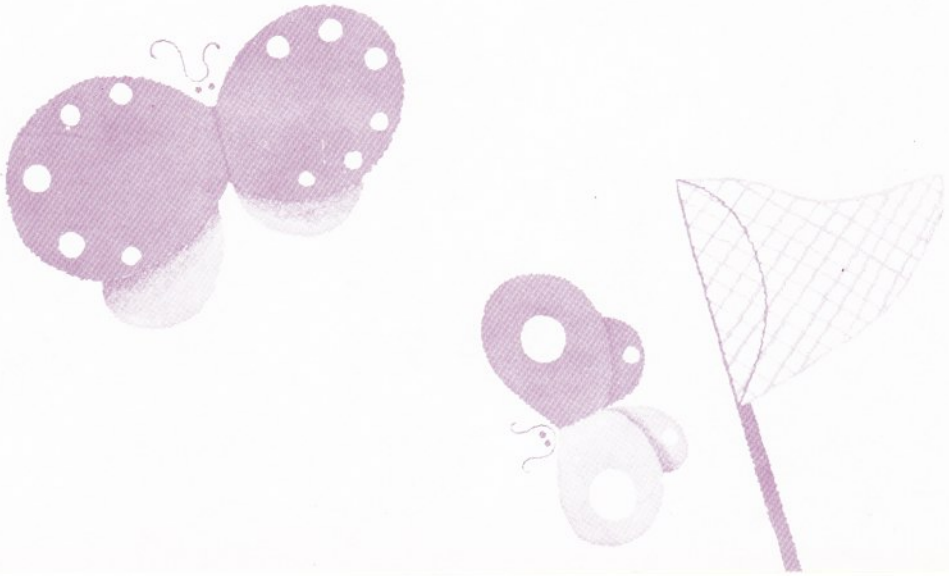
子供たちと　蝶々の
鬼ごっこです。

者も学ぶ者も覚えるまでは一所懸命にやりますが、覚えてしまうとそれまでになってしまうのが普通でした。これはいけません。覚えたから覚えた漢字を読むことが大切なのです。それも、できる限り繰返して読ませることが大切なのです。

女の子

蝶々

なかなか
つかまえることが
できないので、
子供たちは、
家から　網を
持って来ました。
それを　見た
蝶々たちは、
「大変、大変」と、
言って、空高く
舞上りました。



記憶の原理は、第一が〝関心〟第二が〝反復〟です。関心がない

ことには、「心ここにあらざれば、見れども見えず」で、肉眼では見ているはずでも、実際には見ていないのです。だから、幼児の関心を示さないことについては、どんなに熱心に教えたところで、決して成功しないわけです。学習が少しも学習になっていないのですから。

従って、学習に当っては、学習の対象に幼児の関心を呼び入れることが、何にもまして絶対に必要だと言えます。幼児の関心を無視しては、学習は成り立たないのです。

蝶々
船
海

森
山
家

蝶々が　行って
しまったので、
子供たちは

〝習う〟とは〝慣れる〟と同系統の言葉です。くり返して慣れることが〝習う〟ことです。つまり、〝反復〟です。

追いかけるのを
止めて、花びらを
かごいっぱい
集めました。
すると、
花を　求めて、
蝶々が　また
やって来ました。

普通、かなの習得には、数十回の反復が必要だと言われています。漢字だと、数回の反復で大抵覚えられます。しかし、それは〝関心〟があってのことですから、関心がなければ、百回の反復があっても覚えられないことは言うまでもありません。

蝶々
花びら

草原

「花の
ベッドだね」
「この上で
ひと休み
しようか」
蝶々たちは
話し合いました。
蝶々は
あたりに

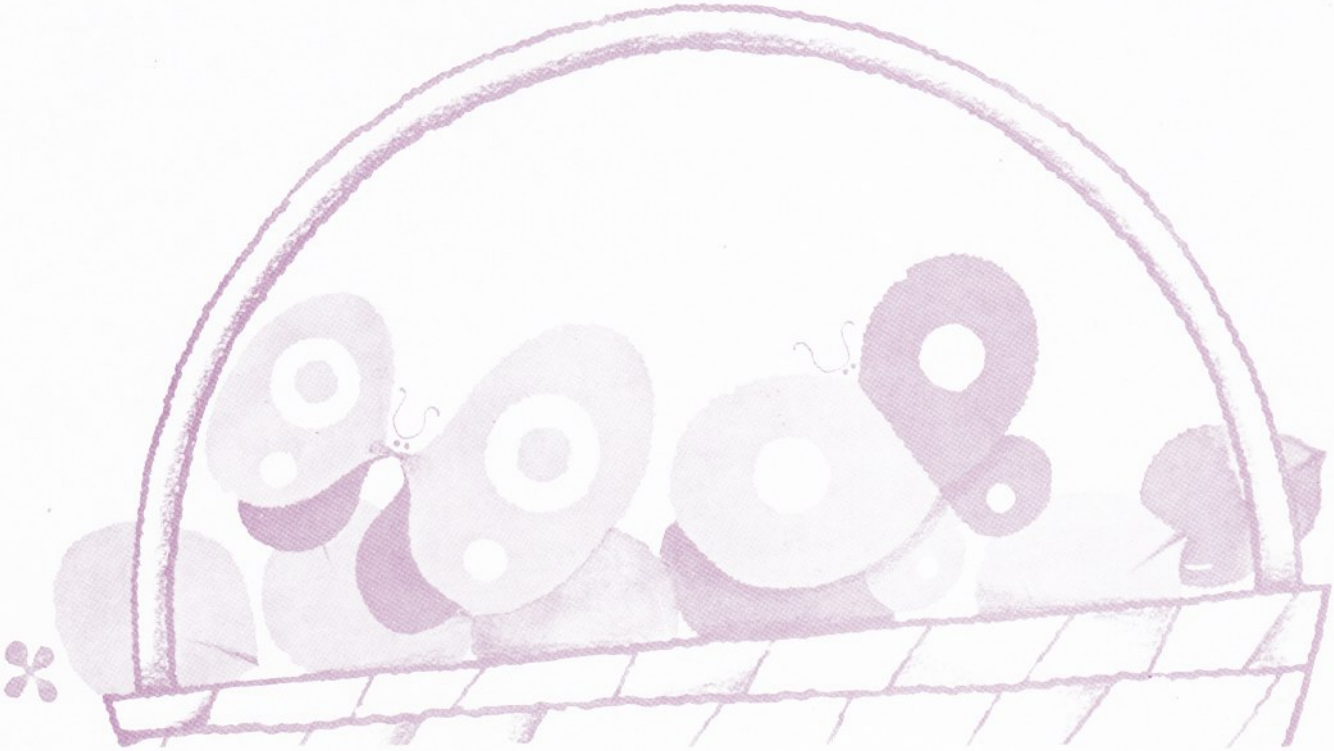
子供が
いないのを
確かめると、
花びらの
ベッドに
舞下りて
ひと休み
しました。

木
蝶々
花びら

空
草原

蝶々は
疲れていたので
そのまま　眠って
しまいました。
その時、子供たちが
やって来て、蝶々の
眠っているのを
見つけると、

「蝶々が
お昼寝してる」
「かわいそうだから
そっとして　置こうよ」
と、言いました。
蝶々たちは、
楽しい夢を
見ていることでしょう。



男の子

女の子

この絵本は、幼児に読んで聞かせるための絵本です。漢字が多いので、読んでみて読みやすいでしょう。幼児の顔を時々見ながら、余裕をもって読んでやることができます。かなばかりで書かれた本は、こうはいきません。

この絵本を使いますと、幼児は、本を読んでもらうことの楽しみを知り、繰返して読んでくれるよう求めるようになります。こうして、幼児は、文をすっかり覚えてしまって、やがておとなのまねをして、本を読むまねを始めます。どの漢字が何と読む字か、いつともなく覚えて、読めるようになります。

でも、私たちは、幼児に漢字を覚えさせることを目的としておりません。ただ、子供たちに、本を読んで聞かせているうちに、子供たちが本来持っている能力により、ひとりでに漢字を覚えてしまうのです。

石井勲の漢字教室 別巻 4
本好きになる漢字絵本 *1*

発行 双柿舎
東京都中央区銀座4－14－11
電話 03(545)2250(代表)